



UWCのドームメイトと(左から2人目が筆者)

の投資環境整備プロジェクトに従事した後、米国に移り多国籍ママ友たちとボランティア活動に励みつつ心理学を学んだ。四〇代ではJICA専門家としてタイに子連れ単身赴任をし、帰国した後は外務省での国際会議と国際機関人事の業務を経て現職に就いた。その後、「人間の安全保障」を研究テーマとして働きながら大学院へ進学し、五〇代でキャリア

アカウンセラーの資格を取得した。ACで劣等生だったぶん、今でも勉強を続けている。

UWCスピリットは Think globally, Act locally

国際協力の現場では、いくつものポストを渡り歩く者が少なくないが、異なる組織、国、職務を経験するなかで一貫して私を支えているのは、自己流UWCスピリットの実践だ。慌てず、焦らず、当てにせず、頭こないで諦めずである。このACで鍛えられたエッセンスと、微力ながら可能な範囲でやってきたパッチワークのキャリアが結晶化して、いつも魔法の杖のごとく私を支え続けてくれた。そしてどの国へ行っても、ACの友人の姿が目につく

び、親近感を抱けることがうれしかった。高校時代に日本を離れてから、国際感覚はどんどん変化し「グローバルな生き方」とは、今いるところで世界を意識しながら、足元から行動することだ」と考えるようになった。ACで得た数々の教訓は、初めての国、新たな仕事でいつも威力を発揮したが、それだけでなく、ラオスや米国でのボランティア、帰国してから地域の防災訓練などの企画イベント、ボーイスカウトやPTAで周りの家族と一緒

に活動するときにも知恵と工夫の種となった。これから私が果たすべき役割は、UWCで得た経験をいろいろなかたちで次の世代へ伝えていくことだと考えている。

UWCで得た経験を次の世代へ

日本を取り巻く情勢は厳しい。これからのグローバル人材は、未知の困難に直面しても日本人の特性を活かしつつ、世界のどこでも集団のなかの核となって活躍することが求められる。青年海外協力隊は、海外での経験によりコミュニケーション能力、企画力、課題発見・対応力、行動力、交渉力などの能力が高まるといわれるが、UWCでの経験はより多岐にわたる能力向上が期待できると確信している。UWCのような留学制度、奨学金制度はこれからの日本を担う人材育成に欠かせない重要な制度だと思う。未来のために働きかけ、挑戦する日本の後輩たちがUWCから巣立つよう、次の時代を担うUWC生が今後も増え続けることを願っている。

UWC日本協会とスポンサー企業の皆様から感謝するとともに、グローバル化が進む厳しい時代だからこそ、一人でも多くの若者たちをUWCに送り出すために、これからもより多くの企業のご支援を賜りたくご協力をお願い申しあげます。

UWCの経験から 次の世代へ向けて

青年海外協力隊
進路相談カウンセラー

岡部恵子
おかへ けいこ

一九七三―七五年UWCアトランティック・カレッジ(英国)留学。
九二年慶義塾大学文学部卒業。二〇〇七年東京大学国際貢献修
士。日本ハネウェル入社後、一九八二年青年海外協力隊員として
タンザニアで活動。外務省、国際協力機構(JICA)、国連開発
計画等を経て二〇〇三年より現職。



「自分は世界のために何ができるだろう」

「この先どう生きようか」とさまざまな思い

を進路に託す若者と日々向き合いながら、彼

らが各国で体験した話に共感できるのは、ユ

ナイテッド・ワールド・カレッジ(以下、U

WC)のアトランティック・カレッジ(以下、

AC)で五〇カ国からの学生と共に暮らし、

学んだ経験のおかげだ。私はいまJICA青

年海外協力隊事務局の進路相談カウンセラー

として、開発途上国で二年間活動をして帰国

したボランティアの進路支援を行っている。

開発途上国の人々と仕事や生活を共にし、世

界の八〇近い国々から帰ってくる隊員たちは、

日本と全く異なる環境のなかで言葉の壁と価

値観の違いや困難な課題に直面して、新たな

世界観を持ち帰る。

👉ACで学んだ生きる力と世界観

AC留学は、古城が舞台となるハリイポッターの魔法学校にいきなり飛び込んだような衝撃だった。「世界は未解決のままの問題に満ちている。さあ君は何をするつもりだ」と、

社会を変える使命を突き付けられた。英語は

下手で音楽しか取りえない私は、混乱した

まま山岳救助隊で絶壁をよじ登り、海洋科学

の実習で泥沼と冷たい海に潜り、合唱団であ

ちこち回って、ACでしかできないことにな

ろいろ挑戦した。ロープから手を離したら崖

から海に落ちる救助活動では、助け合って生

きることに信頼の大切さを学んだ。少人数、

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五九名の卒業生を輩出している。

議論中心の授業は、消化不良ながらも二年目には度胸でなんとか反論できるようになり、毎朝必須の水泳で体力もついた。寮の同室はスペイン、デンマーク、米国人だったが、ベトナム、ポーランド、ボツワナ、イスラエルといった国籍の友人とも互いのふるさとや家族のこと、紛争や貧困のことなどを深夜まで語り合い、世界観がどんどん新しく塗り替えられていった。

👉パッチワークの国際協力キャリア

大学で音楽療法を学び、外資系コンピューター企業に就職した後、青年海外協力隊に参加してタンザニアで生活してみると、第三世界という暗いイメージとは裏腹に、アフリカの大きな魅力に圧倒された。二〇代後半は外務省で国際会議、JICAの研修事業を経て、タイの日本大使館で国際機関を担当し、アジアや太平洋の開発課題にかかわった。三〇代は夫の仕事の都合で、治安の悪かったラオスに乳飲み子を抱えたまま行き、国連開発計画